

ジェンダー教育研究所年報第1号の発刊に寄せて

手嶋昭子

京都女子大学ジェンダー教育研究所 所長

京都女子大学法学部法学科 教授

<はじめに>

2022年10月に京都女子大学にジェンダー教育研究所が開設されてから2年余の時を経て、ようやく第1号の年報を刊行し、皆様に当研究所の活動をご報告できることになりました。当研究所は、本学のグランドビジョンの一つ「ジェンダー平等の実現に貢献できる女性の養成」に基づき、社会の変革を担う女性人材の養成を視野に入れた研究の遂行と教育方法の開発・実施を目的として設置されました。

多くの大学に類似の名称、機能を持つ研究所やセンターがありますが、その中において、当研究所は、ジェンダー課題に関する研究の推進やその成果の発信と、ジェンダー教育の2つを重要な活動の柱としているところに特徴があるのではないかと考えております。各事業の詳細な報告は別途ご参照頂ければと思いますが、当研究所のこれまでの活動を振り返りながら、開設時より、所長として考えてきたことをお伝えさせて頂きたいと思っております。

<調査研究、社会啓発に関する事業>

開設時のキックオフイベントを皮切りに、2023年度には「日本のジェンダー政策と法整備の道のり—1970年代から現代、そして未来へ—」と題しました6回の連続講座を、2024年度には「防災・減災・災害復興とジェンダー主流化—『ふせぐ・へらす・そして立ち上がる』ために—」と題しました全4回のシンポジウムを、企画・実施し、多くの参加者の皆様から高い評価を頂きました。

また、(公財)市川房枝記念会女性と政治センターが長年実施されてきました地方女性議員調査を当研究所が引き継がせて頂き、同センターとの共催事業として、2023年の統一地方選挙における女性議員の動向の調査を実施いたしました。予想外の困難もありましたが、この3月には調査報告書が完成する予定です。

さらに、本学の卒業生である故土井たか子氏が遺された膨大な資料が、縁あって本学に寄贈されることになり、その保管と研究への活用を目指すプロジェクトが2024年春より当研究所の事業として発足しました。多くのメディアで紹介され、社会的にも注目

されています。今後、資料の整理、学術的研究に資する目録の作成を経て、ジェンダーと政治に関わる多角的な研究が始動する予定です。

所長と副所長、特定教授、助教のわずか4人からなる研究所ですが、兼担研究員や客員研究員の先生方のお力もお借りし、また事務局である研究企画課の多大なサポートを得て、上記のような活動を進めてまいりました。この場をお借りして、当研究所の企画にご協力下さいました全国の専門家の方々と、関わって下さった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

<教員・職員・学生の協働による教育効果>

先にご紹介しましたように、当研究所の活動のもう一つの柱である、ジェンダー教育についてですが、教職員や学生といった組織の構成員をはじめ、コミュニティや社会全体をも含めたあらゆるステークホルダーを対象に、ジェンダーに関する知識と理解を深め、各自のエンパワメントにつながる教育的な活動も実施することを目指しています。大学の理念としてジェンダー平等な社会の推進をうたっているにもかかわらず、足元の組織自体がどうなっているのか、構成員にジェンダー視点が共有されているか、ということが後回しになっては本末転倒であると思います。この点に関してはまだまだ課題山積ではありますが、これまで実施してきた事業をご紹介します。

まずは、「ジェンダー教育研究所学生リーダー」の活動です。2022年に当研究所開設の情報を耳にした有志の学生たちが、ぜひ自分達も一緒に活動したいと申し出てくれたのが始まりです。立ち上げ以来、学生たちは多くのプロジェクトを実施し、企業や他大学とも連携し、大変興味深いイベントを開催し、学生目線の斬新な情報発信を続けています。現在、24人が学生リーダーとして活動を行っています。海外では、大学運営の様々なレベルに学生が正式メンバーとして参加している国もあるようです。どのような形態、方法が最適なのかは議論が分かれるところかもしれませんが、日本でも、大学教育の質保証のため、今以上に学生の声を取り上げることの必要性が注目されています。本学でも学生のポテンシャルは極めて高く、大学が適切なサポートを提供すれば、教員の想像をはるかに超えた力を発揮してくれます。当研究所も学生リーダーの活動を全力で応援していきたいと考えています。

次が「未来を創るプロジェクト」です。これは、学内の構成員であれば誰でも応募できるもので、ジェンダー課題の解決を目的としたプロジェクトを援助するプログラムです。本学には既に同様の学生の活動を応援するプログラムがありますが、この「未来を創るプロジェクト」は、学生だけではなく、教員・職員・学生の3者に協働してジェンダー課題に取り組んでもらいたいという願いから始まりました。「ジェンダー教育研究所」の開設にあたって、学内の構成員の皆様には「自分達には関係ないけど、誰かが何かやっているらしい」という受け止め方ではなく、自分もまたその活動の一翼を担うのだ、大学として皆でジェンダーの問題を考えていくのだ、という意識を持って頂きたい、と

ということ、そして、立場の垣根を超えて、対等な関係の中で協働して頂きたい、という思いが、このプログラムには込められています。今後さらに学内で認知度が上がり、多くの構成員を巻き込んだプロジェクトが始動することを願っています。

最後にご紹介するのが、カリキュラム上全学共通領域のジェンダー科目の一つに位置付けられている「ジェンダーと研究」という授業の試みです。これは各学科から1名ずつ担当教員を推挙して頂き、オムニバス形式で行うものです。ジェンダーに関する研究になじみのない先生方でも、それぞれの専門分野の研究をジェンダー視点から見直したとき、何が見えてくるのか、学生と共有して頂くことを目的としています。ジェンダー研究は単なる一個の学問領域に留まるものではなく、あらゆる領域においてジェンダー視点から学術研究の再構築が行われており、これが学問領域におけるジェンダー主流化といわれるものですが、本学においても、将来的には全ての学科において学生がジェンダー視点から学べるように、先生方に取り組んで頂くことを目指しています。

<ジェンダー視点とは>

当研究所は、上記のように多彩な活動を展開して参りましたが、特に私が企画に携わった事業には、私自身がこれまでジェンダーに関して学んできた中で、培った考え方が反映されています。「ジェンダー」とは何か、社会の中では様々に理解されているようですし、学術的にも多様な定義が存在します。私自身は、加藤秀一さんが『はじめてのジェンダー論』の中で書いておられる「私たちは、さまざまな実践を通して、人間を男か女か（またはそのどちらでもないか）に〈分類〉している。ジェンダーとは、そうした〈分類〉する実践を支える社会的なルール（規範）のことである。」という説明が的確ではないかと思っています。また、ジェンダー視点で物事を見るとはどういうことか、というと、私は、性別だけでなく、あらゆる社会問題をゼロベースで考える＝「当たり前」を疑う視座を持つ、ということだと考えています。

フェミニズムの歴史を紐解けば、女性解放ということがジェンダーの考え方の出発点であることは明らかですが、その後、フェミニズムは、人種や障がい、宗教や民族、セクシュアリティなど他の差別問題との緊張関係や対話を通じて、性別の問題だけではない、あらゆる差別の禁止を目指す包括的な運動へとつながってきました。もちろん、フェミニズムも論者によって主張は異なりますし、他の差別問題の解消を目指す運動と手を取り合おうと考えても、複数の差別が重なり合うインターセクショナルリティの問題は複雑であり、単純化してしまうと見失うものがあります。それぞれの差別構造の異同を見据えながら、どのような連携なら可能かを丁寧に検討していく必要があります。

このように、その実現は容易ではないとしても、差別や排除のない社会は、立場を超えて共有できる目標であり、ジェンダーの考え方が目指しているものと私は理解しています。そしてそのために重要なのが、誰かが誰かを支配するピラミッド構造から、誰もが対等な存在として尊重されるフラットな社会構造への転換、人が人を貶めることのない

い、誰もが尊重される社会の実現、ということです。このような社会構造の転換は、一朝一夕にできるものではなく、私の夢にすぎませんが、このような考え方をもとに、研究所の事業を構想できないか、模索してきました。学生リーダーのまとめ役の学生さんたちにも、このような話をして（吹き込んで？）、研究所の教員と学生リーダーとの関係性や、学生リーダーの組織づくりに関しても、従来の枠組みにとらわれないものにしていきたいと思います。

研究所内の関係性についても、ポジションに付与された役割の違い、研究領域の違い、教育に関する経験の違い等がありますが、全てのメンバーは研究者・教育者として対等であり、相互に尊重し学びあって成長していきたいと考えてきました。また、研究所の活動事業に関しても、学生・職員・教員の協働を重視し、学内外の多様な立場の人たちを巻き込んで、年齢や経験、知識の違いに関わらず、対等な仲間として共に新しいものを創り上げていくことを目指しています。研究所のスタッフの考え方や感じ方も共通するところもあれば、異なるところもあるはずで、それらを混ぜ合わせることによる化学反応を、今後も皆で楽しんでいければと考えています。

開設から2年余りが経ち、当研究所の目標と共に課題も明確になってきたように思います。研究所スタッフをはじめ、今後研究所の活動に関わって下さる全ての皆様とともに、さまざまな価値観、考え方に対してオープンでありつつ、京女の「ジェンダー教育研究所」にしかできないことを実現させていければと願っております。今後とも、皆様のご理解、ご協力を賜りますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。